

「食糧生産と飢饉の歴史について」

2014年9月28日。新聞に、キャロライン・ケネディ駐日米大使が山形県米沢市を訪れたという記事を見つけた。父のジョン・F・ケネディ元大統領が江戸時代の藩主・上杉鷹山を尊敬していたことが縁での訪問だった。大使は「父は『一人でも世の中を変えられる』とよく言っていた。鷹山ほどそれを端的に言い表した人はいない」と話し、スピーチを「為せば成る」という鷹山の言葉を引用して締めくくった。

ジョン・F・ケネディと上杉鷹山。場所も時代も異なる二人。しかし、彼らには「社会を変える」という信念のほかに、「飢饉」という共通項がある。私は二人に関係する飢饉、特にアイルランドで発生した「ジャガイモ飢饉」を調査することで、「食糧生産と飢饉の歴史」について考察した。

× × × ×

ケネディ元大統領の曾祖父のパトリック・ケネディはアイルランドに80エーカーの土地と家畜を所有していた。しかし、1850年ごろ、「ジャガイモ飢饉」で疲弊したアイルランドで暮らすことに見切りをつけて渡米、現在の東ボストンに入植した(◇)。ジャガイモ飢饉とはどんな飢饉だったのか。

まず、作物としてのジャガイモの歴史と特徴を概観しておきたい。

原産は南米アンデス。ここを征服したスペイン人によって16世紀にヨーロッパに持ち込まれ、世界へと広まった。日本へは江戸時代にジャワのジャガトラから伝播した。これが「ジャガイモ」の由来である。18世紀には飢饉対策として北海道や東北地方で栽培が始まった。当時、飢饉の際に穀物の代用品として人々を救ったため「お助け芋」と呼んだ地域もあった(◇)。栄養のバランスがよく、ビタミンやミネラルが含まれるので、ミルクでタンパク質を補えば、人は十分に生活できる。「貧者のパン」と呼ばれる所以である(◇)。家畜の餌や蒸留酒の原料にもなる。

ジャガイモは米、小麦、トウモロコシの三大穀物が育たないような高地や乾燥地でも育ち、生育期間が2ヵ月半と短い。1本の苗から平均2キロの収穫があり、カロリーがライ麦の4倍に相当するため、ジャガイモは「歴史上爆発的な人口増加の燃料の役割を果たした」と指摘される(◇)。アンデスの先住民は約200種のジャガイモを栽培していた(◇)。ただ、ジャガイモは交配を経ず、塊茎で栽培されるため、遺伝子がすべて同じになる。これは疫病を急拡大させ、収穫を壊滅させる原因になる。

このような特徴を持つジャガイモがアイルランドに持ち込まれたのは、16世紀末と推定されている。北緯50度の高緯度にあるアイルランドは気温が低く、痩せた土地が多い。アイルランド人はランパー種を単作栽培した。当初は自宅の庭地で栽培する程度だったが、徐々に主食になっていく。手間がかからず、鋤で土を盛って苗床を作り、家畜の糞などの肥料を施して種イモを植えるだけで、あとは放置していてもよく育ったからだ。また、アイルランドを支配していたイングランドの支配階級にとっても、小作人の主食がジャガイモに置き換わるほうが小麦など穀物の収奪に都合がよかった(◇)。アイルランドではジャガイモが主食になるにつれて人口が劇的に増えた。記録によると、1760年の150万人から1841年には817万人へと急増している(◇)。

まさに人口爆発のピーク時にジャガイモの疫病がアイルランドを襲うことになる。1845年のことだ。アメリカで発生した「イモグサレ病」という疫病がヨーロッパの大陸側からアイルランドに上陸する。ランパー種がこの疫病に弱かったことに加え、気候変動の影響が重なり、その年の収穫の4割が失われた。46年は、飢えた人々が種イモを食料に当てたため、作付面積が3分の2になる。さらに47年は種イモ不足で例年の5分の1まで減少した。48年には再び疫病が広まり、収穫がほとんどないという状況だった。人口は1851年には655万人へと激減した。人口増加率から判断すると、その年は人口900万人を超えると見られていたので、100万人がアメリカ大陸などへ移民し、150万人が餓死や栄養不足による病気で死亡したと見積もられている（◇）。

しかし、ここで疑問が生じる。ジャガイモが不足だったとしても、他の穀物を購入することはできなかったのか。また、社会保障政策が十分に整備されていなかった当時だったとしても、なぜ政府は餓死者が出るまで放置していたのか。インド出身の経済学者でノーベル賞を受賞したアマルティア・センは、自身のベンガル飢饉（300万人が餓死）の体験をもとに、「貧しい人々に食料を買えるだけの所得を創出すれば、飢饉は防止できる」と語っている（◇）。つまり、飢饉には人為的な側面があるということだ。ジャガイモ飢饉ではどうだったのか。

アイルランドは、17世紀にクロムウェルが率いる議会軍に征服されて以降、イングランドの植民地状態にあった。プロテスタント系のイングランドは異教徒刑罰法（後に多くの内容が無効）を作り、カトリックが土地を所有することを禁止した。これに伴ってカトリックの多いアイルランド人の土地は没収され、イングランド人に分配された。土地を追われたアイルランド人の多くは小作人か都市や地方の労働者となった。穀物価格が安定していれば、小作人は借地料や税金を払ったうえでなんとか生活できた。しかし、価格が下落すれば、たちまち支払いは滞り、地主よって立ち退きを余儀なくされた。また、細々と暮らしていた労働者たちはイングランドから安価な工業製品の輸入が増えるにつれ、仕事を奪れていった。こうしてアイルランド人の貧窮は度を増していった。

イギリス政府の対応も不十分だったと言われている（◇）。飢饉当時の支配階級は、借地料不払いで強制退去させたアイルランドのカトリックをスコットランドやイングランドのプロテスタント農民に置き換えればよい、という考えだった。このためイギリス政府は十分な救済策を講じなかった。例えば、アイルランド人が飢餓状態にあるにもかかわらず、アイルランドからイングランドなどに大量の穀物が輸出されていた。しかし、政府は規制しなかった。また、食糧不足を解消するために安価な穀物を輸入しようとしても、穀物の価格維持を目的とする穀物法がそれを阻んだ。

アイルランドのジャガイモ飢饉の背景には、貧困を生み出す社会構造や宗教対立、それに人種的な差別と偏見があった。疫病による不作が起因になったが、飢饉に陥ることをなんとかして回避しようという覚悟と意思を支配階級が持ち合わせていなかった。そういう意味で、ジャガイモ飢饉にも「人為的」な側面があったと考える。

ここで、18世紀後期に秋田・米沢藩主である上杉鷹山が取り組んだ藩政改革に触れておきたい。当時の米沢藩は借財が累積し、人口に占める家臣の割合が大きく、財政状況は逼迫していた。藩民は凶作と重税に耐えかねて逃散し、田畑は荒れ放題という状況だった。こうしたなか、鷹山は1767年に17歳で家督を継ぐ。直ちに厳しい儉約令を出すとともに教育振興や殖産興業に乗り出した。

その中に飢饉対策があった。備初蔵を建てた。救荒植物となる80種の山菜や野草や魚鳥獣の肉の調理法と保存法を解説した手引書「かてもの」を発刊し、藩内に1500部以上を配布した。また、タンパク源として鯉を養殖したり、家の垣根に山菜のウコギを植えたりすることなどを推奨した。これらの対策は1782年に始まる天明の大飢饉、1833年からの天保の大飢饉で犠牲者を減らす成果があったとされる(◇)。

× × × ×

以上、アイルランドで19世紀に起きたジャガイモ飢饉を中心に調べてきた。そこに見えてきたのは、食糧増産＝飢饉防止と単純に考えることができないという現実だ。飢饉が発生する原因は複雑だ。社会構造、経済政策、人々の意識などによって不作による食料不足が増幅され、飢饉となる。しかし、もし飢饉が「人為的」に作られるものなら、「人為的」に防止することもできるはずだ。飢饉を防止するための人為的側面を強調していくと、まさに「為せば成る」(鷹山)という社会変革の決意に至るのではないか。

また、ジャガイモ飢饉を調査する前、私は現代の世界で飢饉が起きるだろうかと疑問を抱いていた。しかし、今は「起きる可能性が十分にある」と考える。世界の人口は70億人を突破し、2050年には90億人に達すると予測されている。これに地球温暖化のような気候変動や世界経済の不安定化などが加わる。世界では8人に1人が慢性的な飢餓状態にある(国連調査)。実際に、食料不足を解消するための取り組みや研究が進んでいる。EU(欧州連合)は、栄養価が高く飼育費用の安い昆虫食の研究を始めている。ここで取り上げたジャガイモについても、19世紀以降に品種改良を重ね、現在は野生種を含めるとその数は5000種に達している。歴史を踏まえ、世界の国々の研究機関が飢餓・飢饉対策を進めている。

1997年。イギリスのブレア首相(当時)は、ジャガイモ飢饉の追悼集会で当時の政府の対応に責任があったことを認める手紙を読み上げた(◇)。これに対し、アイルランドのブルートン首相(当時)が答えた。“While the statement confronts the past honestly, it does so in a way that heals for the future”。人の心を癒す(heal)ことも未来の飢饉への備えなのかもしれない。

<参考図書>

「アイルランドからアメリカへ」(東京創元社)

「ジャガイモの歴史」(原書房)

「ジャガイモの世界史」(中公新書)

「ジャガイモのきた道」(岩波新書)

その他の資料